

上司小剣「東京」第四部〈建設篇〉の連載と『上司小剣選集』の刊行について

——信州大学所蔵石井鶴三関連資料から——

荒井 真理 亜（相愛大学）

はじめに

戦後、上司小剣は長篇小説「女性解放」（熊本日新聞）昭和20年12月10日～21年1月18日）の連載を開始し、随筆や評論を書き、短編小説「サラサアテの顔」（苦楽）昭和21年11月、「浪花節イデオロギー」（苦楽）昭和22年2月、「虱」（新潮）昭和22年6月）などを発表した。昭和二十一年二月二十日には生活社より『菅原道真（日本叢書二八）』も刊行している。なかでも、上司小剣にとって大事な仕事だったと思われるのが、「東京」四部作の完結と、『上司小剣選集』全三冊の刊行である。これらは上司小剣の作家人生の集大成とまではずであった。

信州大学蔵石井鶴三関連資料には、「東京」第四部〈建設篇〉の連載と『上司小剣選集』の出版に関する石井鶴三宛上司小剣書簡六通と植村繁樹書簡三通がある。本稿では、これらの書簡を紹介し、上司小剣の晩年の活動を明らかにする。また、日本近代文学館に所蔵されている上司小剣宛石井鶴三書簡には、今回紹介する上司小剣の手紙に対する石井鶴三の返信がある。日本近代文学館に所蔵されている上司小剣宛石井鶴三書簡は、既に拙稿「上司小剣『東京』（四部作）の成立過程——上司小剣宛石井鶴三書簡の紹介——」（日本近代文学館紀要資料探索）第7号、平成24年3月発行）で紹介したが、上

司小剣と石井鶴三とのやりとりを改めて照合してみたいと思う。

一、「東京」第四部〈建設篇〉

上司小剣の「東京」は、第一部〈愛欲篇〉、第二部〈労働篇〉、第三部〈争闘篇〉、第四部〈建設篇〉からなる¹⁾。第四部〈建設篇〉は、雑誌「東宝」の昭和二十一年七月一日発行の再刊六号から昭和二十二年三月一日発行の再刊十号に、計六回連載された。第一回が掲載された「東宝」再刊六号には、次のような作者のことばが掲載された。

私が一生の大事業のつもりで長篇小説『東京』に着手してから、すでに二十数年の月日が流れた。第一部愛欲篇、第二部労働篇、第三部争闘篇を相次いで出版し、争闘篇が出てからも、十八年になる。今度東宝出版社のもとめによつて久しぶりにその稿をつづけ、この第四部建設篇を以て完成することになる。できただけを先づ本誌に発表する。

しかし、第四部〈建設篇〉の連載は昭和二十二年三月で中絶した。「東宝」再刊十号の「編集室より」には「上司小剣氏に百枚書いて

頂いた『東京』も本号を以て一応連載を打切ることになった。以下二百枚完成の上は、単行本として刊行される予定である」とあるが、昭和二十二年九月二日に上司小剣が死去したため、第四部〈建設篇〉は完結せず、よつて長篇「東京」は未完となった。

上司小剣は、①の書簡で「東京」第四部〈建設篇〉の執筆を開始したことを石井鶴三に知らせ、「二年先きに」出版する予定の「単行本」の装幀と挿絵を依頼している。

① 石井鶴三宛上司小剣書簡（仮番号「高5-314」）

石井様 六月二十四日 上司小剣

拝「不明一字 ミセケチ」「啓 右傍挿入」その後は御無沙汰いたしました さて今度二十年振り

で『東京』の第四部建設篇に着手すること

になり、すでに初めの二十回を書き上げました 実は

東宝書店のすすめによりでき次第出版完成する

筈でございますがお忙しいところをおそれ入りますが

向後一ケ年半或は二ケ年を要することと存しま

すので、それまで「幸ひ小生が 右傍挿入」生きて居れば、第一部

愛欲篇から

の御縁えんにちなみ、第四部建設篇の「願・不明一字 ミセケチ」幀装マヤ

挿絵（二三枚でけっこう）二年先きにお願ひいたし

たくいまから切にお願ひいたしておきます 実は

謄写代「不明一字 ミセケチ」「り 右傍挿入」にできるだけを「毎

月 右傍挿入」雑誌「東宝」に掲載

して行きますので、これには挿絵なしのつもりで「き ミセケチ」

「し 右傍挿入」

たところ、今日先方の社員まゐり、挿画なくては

さびしいので、なんとかいふ新進日本画家に頼んだ

とのこと。小生としてはやはりあなたにお願ひしたか

つたのですけれど、雑誌が雑誌「故 ミセケチ」ゆゑ、お忙しいと

ころ

へ御無理を申し上ぐるのが恐れ入りますので、これは先方に

任かしておいて。単行本のときは何分よろしくねがひます。

速達で出された①の封筒表の宛先は「都内／板橋区板橋町（中丸）

／三丁目二六六／石井鶴三様」、消印の日付は昭和二十一年六月二

十四日、時間の記載はなく、地名は「東京都／□□洗□」である。封

筒裏の差出人は「東京都大森区北千束町／六一九番地／上司小剣」

（印）で、封筒裏には上司小剣によつて「六月二十四日」と記され

ている。封筒には松竹写真部のもを用いており、便箋は二〇×二

〇字の原稿用紙一枚である。差出人以外は封筒も便箋もペンで書か

れている。

上司小剣の自筆年譜（『現代日本文学全集 第23篇』昭和5年4月

13日発行、改造社）によると、第四部〈建設篇〉は昭和五年に起筆

とあるが、①の書簡で上司小剣は「今度二十年振りで『東京』の第

四部建設篇に着手することになり、すでに初めの二十回を書き上

げました」と述べている。上司小剣が本格的に第四部〈建設篇〉の

執筆を開始したのは、戦後のようである。

「それまで幸ひ小生が生きて居れば」という言葉から、晩年を迎

えて気弱になっている上司小剣の様子が窺える。

第四部〈建設篇〉の「できただけを毎月雑誌「東宝」に掲載し

て行きますので、これには挿絵なしのつもりでしたところ、今日先方の社員もあり、挿絵なくてはさびしいので、なんとかいふ新進日本画家に頼んだとのこと」という。第四部〈建設篇〉の挿絵は、第一回を福山義夫が、第二回以降を宮田重雄が担当している。福山義夫については今回の調査では詳しい経歴が明らかにならなかった。一方、宮田重雄（一九〇〇—一九七二）は愛知県出身で、慶應義塾大学医学部を卒業、医療に従事するかたわら、洋画家の梅原龍三郎に師事した。宮田は洋画家であるので、上司小剣がいう「なんとかいふ新進日本画家」とは、第一回の挿絵を描いた福山義夫のことであろう。

上司小剣は、雑誌連載時の福山義夫と宮田重雄による挿絵があるにもかかわらず、単行本化の際には石井鶴三に新たな挿絵を描いてほしいというのである。

上司小剣は「石井鶴三さんを語る」（『書窓』第2巻3号、昭和10年12月18日発行）の中で、次のように語っている。

私の力作に挿絵を入れる場合、私はいつも石井鶴三氏におねがひする。著書の幀装も、多くは石井氏におたのみする。石井氏ほど私の気持ちをよく諒解して下さいる画家は、ほかにない。私の大好きな、最も敬愛する石井さん。初めてお目にかかったのは、もうかれこれ十六年前、私が『婦人公論』に『森の家』といふ長編を連載したときである。石井さんの芸術的良心と、息づまるやうな努力とに打たれて私の作品までが向上したやうな気がした。つづいて、私の一生の長編『東京』には新聞に載つたときの挿絵から、第一部、第二部と出版の節は、いつも挿絵と幀装とを石井さんに引き受けていただいた。今後

第四部までの完成ができる折りには、やはり、石井さんに幀装をおねがひしたい。

上司小剣は、以前から「私の一生の長編『東京』の「今後第四部までの完成ができる折りには、やはり、石井さんに幀装をおねがひしたい」と考えていたことがわかる。①の書簡に上司小剣が「第一部愛欲篇からの御縁にちなみ」と書いているように、第一部〈愛欲篇〉の新聞連載時の挿絵をはじめ、「東京」の挿絵や装幀はすべて石井鶴三が担当したからである。上司小剣は「石井さんの芸術的良心と、息づまるやうな努力とに打たれて」、石井鶴三を「敬愛」し、仕事を依頼していた。「私の力作に挿絵を入れる場合、私はいつも石井鶴三氏におねがひする」と述べているが、逆にいえば、上司小剣が石井鶴三に挿絵や装幀を依頼した小説は、上司小剣の「力作」であり、上司小剣にとって特に思い入れの強い作品だったといえよう。

二、『上司小剣選集』

上司小剣が「東京」第四部〈建設篇〉の執筆と並行して準備を進めていたのが、『上司小剣選集』の出版である。

『上司小剣選集Ⅰ 平和主義者』は、昭和二十二年十一月五日に刊行された。奥付によると、発行所は育英出版、発行者は藤田周二、住所は大阪市東区十二軒町七である。印刷所はミスミ印刷、印刷者は八ッ橋久、住所は大阪市東区十二軒町八である。配給元は日本出版配給、住所は東京千代田区淡路町二ノ九である。B6判、紙装、カバーと帯付き。定価は七十五円、二七九頁。収録作品は「平和主

義者」(『中央公論』昭和12年4月)、「菅原道真」(『菅原道真』日本叢書二八) 昭和21年2月20日、生活社)、「天満宮」(『中央公論』大正3年9月)、「鱧の皮」(「ホトトギス」大正3年1月)、「石合戦」(『中央公論』昭和13年5月)の五篇³⁾で、巻末に無署名の「解題」がある。別紙で「平和主義者 上司小剣選集栞一」も付されている。

『上司小剣選集Ⅱ 蜘蛛の饗宴』は、昭和二十三年一月二十五日に刊行された。定価は九十円、二八八頁。収録作品は、「蜘蛛の饗宴」(『中央公論』昭和8年5月)、「サラサアテの顔」(「苦楽」昭和21年11月)、「父母の骨」(『中央公論』昭和10年2月)、「癩」(「趣味」明治43年4月)、「長火鉢」(「新小説」明治44年3月)、「父の婚礼」(「ホトトギス」大正4年1月)、「Aの妻・Bの夫」(「文芸春秋」昭和13年2月)の七篇である。「解題」は植村繁樹が書いている。別紙で「蜘蛛の饗宴 上司小剣選集Ⅱ」が付されている。その他は『上司小剣選集Ⅰ 平和主義者』と同じである。

『上司小剣選集Ⅱ 蜘蛛の饗宴』に掲載された広告によると、『上司小剣選集』は全三冊刊行される計画であった。第三巻の副題は「浪花節イデオロギー」である。第三巻には「浪花節イデオロギー」(「苦楽」昭和22年2月)、「紫の血」(『中央公論』大正3年5月)、「英霊」(『中央公論』大正9年7月)、「空想の花」(『中央公論』大正7年12月)、「蜂」(『文学世界』大正11年10月)、戯曲「U新聞年代記」(『中央公論』昭和8年11月)が収録される予定だった。しかし、管見に入ったのは『上司小剣選集Ⅰ 平和主義者』と『上司小剣選集Ⅱ 蜘蛛の饗宴』の二冊である。安部宙之介が『白鳥その他の手紙』(昭和42年1月5日発行、木犀書房)の中で、『上司小剣選集』について「没後十一月と翌年一月と二冊出て三冊出なかった」と述べているので、第三巻は結局刊行されなかったのである。

上司小剣は、『上司小剣選集』の装幀も石井鶴三に依頼している。その書簡が②と③である。

② 石井鶴三宛上司小剣書簡(仮番号「高1-222」)

拝啓 お忙しいところを、大へんだらうと思つて、よみうりの挿絵毎日のしく拝見してゐます。(本文は読みませんが)私の「東京」はあなたの挿画が「得られ ミセケチ」いたゞけなかつたので、書くにも張り合ひのないやうな気がして居ります。「でも百枚書きました」右傍挿入(出版店が初めから挿画を入れると言

へば、無理にもお願ひしてみるのですが。いつぞや電通から出しました挿絵展覧会あの立派な豪華な図録を出して、あなたの美事な「東京」

の洋画の挿画に見とれてゐます。この秋に大阪から、私の短篇ばかりの選集を四冊出すさうで、準備中ですが、幀装^{マツ}のおねがひができませんでせうか。田舎の方がよいものができるやうです。紙も印刷も。

一月九日

葉書表の宛先は「都内/板橋区板橋町三丁目二六六/石井鶴三様、消印の日付は昭和二十二年一月九日、時間は記載なし、地名は「大□/東京都」である。差出人は「東京都大森区北千束町/六一九番地/上司小剣(印)」である。葉書の表も裏もペンで書かれている。

上司小剣が「毎日のしく拝見して」いるという「よみうりの挿絵」とは、昭和二十二年一月一日から三月七日まで『読売新聞』の

朝刊に連載された長谷川伸作「明治の鼠」の挿絵である。石井鶴三は六十一一点の挿絵を描いている。

また、上司小剣は「いっそや電通から出しました挿絵展覧会のあの立派な豪華な図録を出して、あなたの美事な「東京」の洋画の挿絵に見とれてみます」と述べている。「挿絵展覧会」とは、昭和二年四月二十二日から五月十五日に開催された春陽会展覧会第五回展を指すのであろうか。春陽会展覧会は第五回より「東京府美術館」（現・東京都美術館）が会場になり、初めて挿絵室が設けられたのである。石井鶴三は上司小剣の小説「東京」と「花道」の挿絵を出品している。

②の書簡には「この秋に大阪から、私の短篇ばかりの選集を四冊出す」とある。「私の短篇ばかりの選集」は『上司小剣選集』である。先にも述べたように、『上司小剣選集』は全三冊で計画されていた。しかし、②の書簡によつて、当初は「四冊出す」予定であったことがわかる。

続けて、上司小剣は「田舎の方がよいものができるやうです。紙も印刷も」と述べている。しかし、関西の出版界の状況は厳しいものだったようである。昭和二十二年十一月一日発行の「関西出版新聞」第七号によると、「戦災のため近傍の製紙工場も大阪市内の印刷工場も潰滅的打撃を蒙つた。大阪の出版社の殆んどが貴重な紙型を焼失した」とある。特に紙不足は深刻で、「用紙事情を聴く」（「関西出版新聞」第3号、昭和22年9月1日発行）では、「紙生産の見とおしはついている、今はどんだ底だ、なお、一二年は苦しかろう」という官庁の西川事務官談とあわせて、王子製紙都島工場の三橋課長の次のようなコメントが紹介されている。

パルプ及び原料はかつながら生産計画をみたしているが、硫黄、さらし粉、ソーダなどの副資材の獲得には日夜奔走しているしかし何といても燃料の配給難が頭痛の種で、石炭は四、五日の作業にも事を欠く有様であり、電力事情も悪く現在週に二回の休電日を余儀なくされる上に、突発的の停電が度々あつて困つている

さらに、昭和二十三年二月一日発行の「関西出版新聞」第十号にも「製紙業界お先真暗三・四月は最どんだ底か」という記事が掲載されており、上司小剣の言うような「紙も印刷も」「田舎の方がよいものができる」状況ではなかったのである。

上司小剣は、③の書簡で『上司小剣選集』第一巻の出版予定を知らせ、改めて装幀を依頼している。

③ 石井鶴三宛上司小剣書簡（仮番号「書5—42」）

たびたびうるさく手紙など出しまして、おそれいます。実は参上お邪魔いたす筈のところ、先月末「来 右傍挿入」臥床失礼して居ります。大阪の方からお願ひいたしたはずですが、小生の最期の「選集」にあなたの鎮装をいただければ、どんなに幸福かと念願いたして居る次第でございます。出版は第一巻六月のよいでございますから、どうにか御多忙のおくり合せが、つかないでございませうか。東宝出版社の「東京」建設編の方も是非おねがひいたし「た 右傍挿入」く、これは書きおろしが、今年一ぱいになるつ

もり

でございますから、二重の願ひながら、時日に多少のゆとりあることと察して居ります。

先は無理な願ひばかりで、恐れ入ります。

二月九日

上司小剣

石井鶴三様

封筒表の宛名は「都内／板橋区板橋町三ノ二六六／石井鶴三様」、消印は判読できない。封筒裏の差出人は「東京都大森区北千束町／六一九番地／上司小剣（印）」である。封筒の裏と本文の末尾に上司小剣によって「二月九日」と記されている。話題になっている「選集」は、前述の『上司小剣選集』である。したがって、③の書簡は『上司小剣選集』の出版が企画された昭和二十二年二月九日に認められたものである。本文は二〇×一〇×二の原稿用紙に書かれている。封筒も原稿用紙もペン書きである。

「小生の最期の「選集」とあるから、上司小剣は死期が迫っていることを感じ、『上司小剣選集』の刊行が自分にとって最期の仕事になるだろうと考えていたのであろう。「たびたびうるさく手紙など出しまして、おそれいます」と述べているが、自分に残された時間が少ないことを思って上司小剣は、石井鶴三に「小生の最期の「選集」の装幀を引き受けてもらうために、再び手紙を書いたのである。

③の書簡に対する石井鶴三の返事が、拙稿「上司小剣『東京』（四部作）の成立過程―上司小剣宛石井鶴三書簡の紹介―」（前掲）で紹介した、昭和二十二年二月二十七日付の封書である。石井鶴三は「此頃御臥床との御事 御風邪でもありませんか 何卒御大切に遊ばされ

たく もう春も近きことにて春暖と共に御快方念じあげます」と案じている。③の書簡に上司小剣が「実は参上お邪魔いたす筈のところ、先月末来臥床失礼して居ります」と書いていたからである。石井鶴三は「御申越の御著装幀のこと承知致しました 及ばすなから努力致して見ませう 御選集の方 第一巻は六月の御予定の由いづれ委しく御うかゞひ致した上 考をすゝめませう 「東京」の方も承知致しました 建設編が御出来になり完結となること慶祝の至りであります」と述べ、上司小剣の依頼を承諾している。

そして、上司小剣が『上司小剣選集』の書名や著者名に用いる漢字を知らせたのが、④の書簡である。

④ 石井鶴三宛上司小剣書簡（仮番号「書5―19」）

冠省 先日大大阪育英出版社の植村が

たびたびお邪魔いたしおそれいました。

装装^{ママ}を願つて居ります選集の著者名ですが、

上司小剣の剣は、漢字制限で剣だけとな

り、劔も劔も廃字同様になりましたから、

どうか劔の字にお書き下さいますやう、

不図思ひ出しましたので「改めて 左傍挿入」お願ひ申し上げます。

六月十四日

五行目の「劔」のつくりを上司小剣は「刃」と書いているが、翻刻では「劔」を用いた。

葉書表の宛名は「都内／板橋区板橋町三ノ二六二／石井鶴三様」、

消印は昭和二十二年六月、消印の日付は不鮮明で読めないが、上司小剣が本文に「六月十四日」と記しているので、昭和二十二年六月十四日の書簡である。消印の地名は目黒、時間は判読できない。差出人は「東京都大田区北千束町／六一九番地／上司小剣（印）」である。葉書の表も裏もペンで書かれている。

④の書簡には「上司小剣の剣は、漢字制限で剣だけとなり、劔も劔も廃字同様になりましたから、どうか劔の字にお書き下さいませやう」とある。昭和十七年六月十七日に国語審議会が文部大臣に答申した「標準漢字表」では「劔」は「劔」の字が常用漢字であったが、昭和二十一年十一月六日に内閣が告示した「当用漢字表」では「劔」になっている。

上司小剣は、冒頭で「先日來大阪育英出版社の植村がたびたびお邪魔いたしおそれいました」と述べている。石井鶴三の日記には、昭和二十二年三月十八日に「育英出版社植村氏來 上司小剣選書出版につき装幀依頼」とあり、実際に「大阪育英出版社の植村」が石井鶴三を訪ねたことがわかる。

「大阪育英出版社の植村」は、上司小剣に師事していた植村繁樹である。植村繁樹の「孤独の文学—先生と弟子と—」（平和主義者上司小剣選集菜Ⅱ「前掲」）によると、「僕が初めて先生を訪ねたころ、それはもう十数年前の冬のある日であったが、当時『蜘蛛の饗宴』が中央公論に書かれたところであった。僕は奈良の手向山八幡宮に僕の母がすこしばかり血縁があつて、それで先生を訪ねて行つた」という。「蜘蛛の饗宴」は昭和八年五月に発表されているので、植村繁樹が初めて上司小剣を訪ねたのは、昭和八年の「冬」であろう。上司家は、代々「奈良の手向山八幡宮」の神職であった。上司小剣の父は三男であったため、分家して摂津多田神社の神主となったが、

手向山八幡宮には伯父がいた。植村繁樹は母の縁故を頼つて、中学卒業後すぐに上京し、上司小剣に会いに来たのである。その後、「三月に一篇、五ヶ月目に一篇と書くものは先生のおかげで、文芸首都にそれぞれ発表の機会は与えられ、三年ほどして『平川虎臣君や安部宙之介君やと一緒に、『日本記録』をやりはじめた』。昭和十九年に郷里に疎開し、戦後は育英出版に勤めていた。上司小剣が大阪の育英出版から選集を出すことになったのも、自分の弟子である植村繁樹が勤めていたからである。

次に挙げる⑤⑦の書簡は植村繁樹が石井鶴三に宛てたものである。いずれも『上司小剣選集』に関する連絡なので、昭和二十二年に書かれたものである。

⑤ 石井鶴三宛植村繁樹書簡（仮番号「書1—91②」）

謹啓。新緑の候、先生にはいつもながら御健勝にわたらせらるる御由に拝し大慶至極に存じあげ奉ります。下つて小生も相変らずのありさまにて消光仕りをりますれば、他事ながら御休心なしますよう、お願い申し上げます。

陳者、先般からお願ひ申しあげてをりました上司先生の選集の御装幀につきましては、御繁忙中いろいろと御厚意を相賜りをりますこと、存じ有難く厚く御礼申しあげます。さて、来る八日の夜行列車にて上司先生と打ち合はせのために上京いたすこと、相成りましたので、十日には先生のおもとに御機嫌お伺ひに参上出来る予定をいたしてをります。選集

第一冊目は五月末に初校ををはりまして、只今再校「改ページ」中でございますので、甚だ勝手がましいお願いでございますが、先生にも何卒よろしくお願ひ申しあげたく存ずる次第でございます。

先は右、御機嫌お伺ひを兼ねまして、選集の印刷情況のお知らせやら、お願ひやらにて。
敬具

六月二日

植村繁樹

石井鶴三先生

封筒はなく、便箋二枚である。育英出版の便箋を使用している。本文の末尾に「六月二日」とある。

植村繁樹は「来る八日の夜行列車にて上司先生と打ち合はせのために上京いたすこと、相成りましたので、十日には先生のおもとに御機嫌お伺ひに参上出来る予定をいたしてをります」と書いている。石井鶴三の日記には、昭和二十二年六月十二日に「午前植村氏来の由」とある。しかし、翌十三日に石井鶴三は「植村氏待てど見えよつて一筆書き残し美校に行く」と記している。一方、上司小剣が安部宙之介に宛てた昭和二十二年六月二十日付の葉書で「先日植村が来て十二日と十三日と拙宅でお待ちしてゐましたが、お見えにならず失望して、十三日の夜行で帰阪しました」（安部宙之介『白鳥その他の手紙』前掲）と報告している。植村繁樹は、石井鶴三を訪ねる予定であった十二日に、上司小剣の家で安部宙之介の来訪を待っていたのである。

⑤の書簡からしばらくして、植村繁樹は石井鶴三に装幀を催促している。それが⑥の書簡である。

⑥ 石井鶴三宛植村繁樹書簡（仮番号「書1-91①」）

謹啓。時下暑熱厳しい折り柄 先生にはいつもながらお変わりなく御健勝にわたらせらるる御事と存じおよろこび申しあげます。下つてその後無事の日を送りおりますれば、全くの他事ながら何卒御休心相賜り度くおねがひ申しあげます。

私も

扱而先月来おねがひ申しあげました上司先生選集の御装幀を一日一日おまち申しあげて居りますが、いまだ頂戴出来ませず、何卒よろしくおねがひ申しあげたく存じあげます。

小説本文の方は既に印刷も順調にすすみまして、只今御装幀を頂戴いたしますれば、最も都合の時でございますので、切におねがひ申しあげる次第でございます。何かと御多用の御事とは存じますが、御事情御推察の上、何卒よろしくおねがひ申しあげます。「改ページ」

先は右書中簡略ながらおねがひまで

敬具

七月十二日

植村繁樹

石井鶴三先生

二伸

尚これは私信でございますが、来月中に上司先生の序文でお骨折りをいただきました小生の最初の創作単行本が発刊になります。恐縮ながら 先生にもおいそがしいうち是非おめとほしをねがひたく 発刊の節はお届け申しますから、御批

評のほどをおねがひ申しあげます。

封筒はなく、育英出版の便箋二枚である。本文の末尾に「七月十二日」と記されている。

上司小剣は石井鶴三に宛てた③の書簡で「出版は第一巻六月のよい」と言っていた。⑥の書簡から『上司小剣選集Ⅰ 平和主義者』は当初の予定より遅れてはいたが、昭和二十二年七月十二日には本文の印刷の準備が進んでいたらしい。

植村繁樹は「先月来おねがひ申しあげました上司先生選集の御装幀を一日一日おまち申しあげて居りますが、いまだ頂戴出来ませぬ」と書いている。『上司小剣選集』の装幀については、既の上司小剣が①と②の書簡で石井鶴三に打診していたが、出版社からの正式な依頼があったのは「先月来」、すなわち六月だった。植村繁樹は「只今御装幀を頂戴いたしますれば、最も好都合の時でございますので、切におねがひ申しあげる次第でございます」と述べている。石井鶴三には装幀のために六月から七月十二日までの時間があつたことになる。

なお、「上司先生の序文でお骨折りをいただきました小生の最初の創作単行本」とは、昭和二十二年八月三十日に育英出版から刊行された植村繁樹の『葬送行進曲』である。その「序」を上司小剣が書いている。上司小剣はその中で「著者の美点は、世俗の功名をあせらぬことであつた」「そこを私は、ひそかに高く買つてゐた」と述べている。さらに、上司小剣の「序」には「植村は創作勉強の傍ら、新聞記者や雑誌の編輯をやつたり、また中学校の教師にもなつたりした」とあり、植村繁樹が育英出版に勤め、「最初の創作単行本」を出版するまでに、『日本記録』の編集だけでなく、新聞記者や中学校教

師もしていたことがわかる。

植村繁樹は⑥の書簡を出した三日後、再び石井鶴三に手紙を書いている。それが⑦の書簡である。

⑦ 石井鶴三宛植村繁樹書簡（仮番号「書1—91③」）

謹啓。毎日毎日暑いことですが、先生にはお変わりなく御消光の御事と

存じおよろこび申しあげます。さて、再三早速便を差しあげて恐縮でございます

いますが、いよいよ上司先生の選集の印刷の準備が完了いたしました。この上は

先生の御装幀を待つて検閲を終つて書物にするばかりでございます。御多忙

中、また暑中まことに申しあげかねますが、何卒事情御推量下さいまして

至急御完成下さいますやう切におねがひ申しあげます。尚最近上司先生に

は暑気あたりにて胃けいれんをおこされ病臥遊ばされて居ります。上司先

生を御元氣、御病氣御恢復を祈りたく、一日も早く選集発刊を切に希

望いたす次第でございます。書中まことに恐縮でございますが、何卒よ

ろしく是非御送り附け下さいますようおねがひ申しあげます。

敬具

石井鶴三先生

七月十五日

植村繁樹

封筒はない。育英出版の便箋二枚で、二枚目に「2」と頁が振つてあるが、二枚目は白紙である。

印刷の準備が完了し、あとは石井鶴三の装幀を待つのみとなったことを知らせている。そして「何卒事情御推量下さいまして至急御完成下さいませやう切におねがひ申しあげます」と述べている。

さらに「最近上司先生には暑気あたりにて胃けいれんをおこされ病臥遊ばされて居ります」という。昭和二十二年春頃から、上司小剣は胃痙攣を繰り返し、体調不良が続いていた。植村繁樹が『上司小剣選集』の刊行を急いだのは、出版が予定より遅れてしまったこともあるだろうが、上司小剣の体調が思わしくなかったからではないだろうか。

しかし、石井鶴三の装幀は間に合わず、上司小剣が石井鶴三に⑧の詫び状を書いている。

⑧ 石井鶴三宛上司小剣書簡（仮番号「高1—223」）

冠省 お忙しいところを無理なお願ひをいたしお

それ入りました 御幀装遂ひに間に合はず、でき合

ひのまま出版するさうで小生にとり一ばん残念に存じましたがもともと七月には出すつもりのおくれにおくれましたので、この上お待ちできないさうで九月には是非第一巻を出したいさうで事情あしからず、関西の赤

本屋ではないのですが御感情さこそと拝察しお詫び

申し上げます この次ぎ「東京」の折りには前々からの

御縁もあり是非々々お願ひいたしたいと存じて居ります。

実は一昨日日文部省会議室でお目にかかれると思ひ

委しく申上ぐる筈でしたがお見「え 左傍挿入」「不明二字 ミセ

ケチ」にならないやうで

失礼いたしました。お詫びまで 草々。 八月九日

葉書表の宛先は「東京都板橋区板橋三丁目（旧中丸）／二六二／石井鶴三様」である。消印の日付は昭和二十二年八月九日、時間は記載がなく、地名は「東京都／□□□□」である。差出人は「東京都大田区北千束町／六一九番地／上司小剣」（印）である。差出人以外は葉書の表も裏もペン書きである。

上司小剣は「もともと七月には出すつもりのおくれにおくれましたので、この上お待ちできないさうで九月には是非第一巻を出したいさうで事情あしからず」と出版社の意向を伝え、「御感情さこそと拝察しお詫び申し上げます」と謝っている。

上司小剣は、安部宙之介に宛てた昭和二十二年八月二十日付の封書（安部宙之介『白鳥その他の手紙』前掲）で、次のように述べている。

ぼくの本も石井さんの装幀結局間に合はず、昨日石井さんからの来状（旅行中、南船北馬の）によつて、一所懸命にやってくれ、旅行鞆に画稿を詰めて、練つてくれたらしいのですが、ぼくの想像通り大阪の本屋といふことが悪感のもととなり。それに植村の態度が気に入らず、心証を害して思ふやうにできなかつたらしいのです（植村自身は、とつても石井先生に好感

を以って迎へられたやうに言つて居りましたが)しかし、本は二ヶ月ほどおかれて来月中にはできさうです。

「昨日石井さんからの来状」というのが、拙稿「上司小剣『東京』(四部作)の成立過程—上司小剣宛石井鶴三書簡の紹介—」(前掲)で紹介した昭和二十二年八月十五日の上司小剣宛石井鶴三書簡である。石井鶴三は装幀が間に合わなかったことを詫び、その理由を次のように述べている。

出版所がはなれて居ることが一つはどうも具合がよろしくないやうでありまして打ち合せもまよくゆかず さういふことも仕事をするにあたり気持の上にはさはるところもあるやうであります 来るといふ日に待つて居ても来なかつたりまた時間を守られなかつたり 今日のこと故 乗りもの其他の不便なること承知致し居りますから決して其人を責めるわけにはなけれど かういふことが気分をそこね用事を停頓させ仕事にさはるところあつたのは事実でありました 出版所が東京にあれば かういふことからは救はれるかとも考へます

「来るといふ日に待つて居ても来なかつたり」というのは、先に述べた、植村繁樹が石井鶴三を訪ねる約束だったにもかかわらず、上司小剣の家で安部宙之介を待つていた、昭和二十二年六月十二日のことであろう。石井鶴三は「今日のこと故 乗りもの其他の不便なること承知致し居りますから決して其人を責めるわけにはなけれど」と付け加えているが、実は上司小剣も「大阪の本屋」に多少の不満や不安を感じていたらしく、安部宙之介に宛てた昭和二十二年

七月二十三日付の葉書で「植村からは簡単な手紙が来て、(中略)私の方の本もどの程度進行してゐるのか、石井さんがかいてくれぬ、一てんばりで埒があきません」(安部宙之介『白鳥その他の手紙』前掲)と愚痴をこぼしている。

「出版所がはなれて居ることが一つはどうも具合がよろしくないやうでありまして」という石井鶴三に、上司小剣は⑨の書簡で次のように応えている。

⑨ 石井鶴三宛上司小剣書簡(仮番号「書5—43」)

石井様 上司小剣

信州よりのお手紙、ありがたく。御装幀が間に合はず、いただけなか

つたのは、小生終生の恨事、もはや出来た本も見る気にならず

第二巻以下も気乗りがしなくなりました。大阪が出版元と

いふことが御感情上面白くなかつたのは、当初から想像いたして

居りました。実は小生も、はじめさういふ気もちでしたが、御承

知「のこと」、ミセケチ」「でもありませうが、右傍挿入」、小生の

初期の作品は大抵大阪が舞台で、言はば

大阪出身ですし、この縁故の地から出すのもわるくはないと考

へなほし、且つ本の出版株式会社の社長藤田といふ「若い 右傍挿

入」人が大阪

人に珍らしく理解のある人「物 右傍挿入」で、「二つは 右傍挿入

それに動かされたのです。い

つでできるかわかりませんが、「東京」建設編のときは、どうか

よろしく願ひます。

卑しいことを申し上げますが、物価高の「今 ミセケチ」「現
右傍挿入」在、あの本が

一日も早く出ないと、経済生活に脅かされるといふ台所の問
題もあり、二ヶ月「余 右傍挿入」もおくれましたので、四苦八苦
のていでござ

いました。(その事情を察し、藤田社長は商売上手の人の上
に、思ひやりもよく、最初に契約金(一万部づつ刷るといふ)と
して、一万円を、また先月には印税の前渡しとして一万円を
送つてくれましたが、それも焼石に水、台所からは頻りに

出版を急ぐ声がおこり、本屋の会計もそれに共鳴して

小生を苦しめたのでした。飛んだ「こと ミセケチ」「内世話 左
傍挿入」まで白状して、卑俗な

手紙を書きましたことをおゆるし下さいまし。涼しくなり

ましたら、是非一度お目にかかつて久しぶりにいろいろ申し上

げたいと存じ「東京」のお打ち合せもいたしたいと「存じ ミセケ

チ」「思つ 右傍挿入」て

居ります。残暑きびしい折柄折角お大事に。草々。

八月 二十日

封筒表の宛名は「東京都／板橋区板橋「町 右傍挿入」三丁目二
六二(旧中丸)」である。消印は昭和二十二年八月二十六日、時間
の記載はなく、場所は判読できない。封筒裏の差出人は「東京都大
田区北千束町／六一九番地／上司小剣」(印)である。本文は京は
し堂製の二〇×一〇×二文字の原稿用紙に書かれている。封筒も原稿
用紙もペン書きである。

上司小剣は「大阪が出版元といふことが御感情上面白くなかつた

のは、当初から想像いたして居りました」と述べている。先にも触
れたように、上司小剣自身も、出版社が遠方であるために、連絡が
取りにくく、また出版社の様子もわからなかつたのである。そのこ
とが石井鶴三の作業に支障をきたさないかを案じていたようだ。

先の⑧の書簡で上司小剣は育英出版を「関西の赤本屋ではないの
ですが」と言っていた。「赤本」は明治期からあつた少年向きの講談
本のことで、昭和期に入ると漫画本を指すようになった。内容が低
級で、粗雑な本というイメージがある。

育英出版は、主に漫画や児童書を刊行していた出版社である。『上
司小剣選集』のような文芸書の出版は数少ない。育英出版が発行し
ていた月刊雑誌「ハロー・マンガ」は、デビュー当時の手塚治虫の
作品を掲載したことで知られる。また、昭和二十二年一月三十日に
育英出版から刊行された酒井七馬と手塚治虫の合作長篇漫画『新宝
島』は、大ベストセラーとなつた。手塚治虫の『新宝島』改訂版刊
行のいきさつ(『手塚治虫漫画全集281新宝島』昭和59年10月3日発
行、講談社)によると、『新宝島』は「四十万という部数を刷り」、「こ
れを契機に、第一次戦後漫画ブームがはじま」つたという。しかし、
『新宝島』の奥付には酒井七馬の名前しか載っていないかつたり、手塚
治虫の作つたストーリーやセリフを相談もなく変えられたり、手塚
にとつては納得のいかないことが多かつたようだ。しかも、「原本は
極めて粗悪な描き版によるもので、原稿の絵をいちじるしくきずつ
けて」いたとして、手塚治虫は当時の「描き版」について、次のよ
うに述べている。

当時、原稿製版は写真にとつてそのまま版におこすのではな
く、版下屋さんが、その原稿を自分でトレース版にひきうつ

してオフセット版をつくるのが、関西のマンガ本のならわしでした。もちろん、へたくそな版下屋さんですと、原稿をめちやめちやにしてしまつて、目もあてられないひどい線の作品が出版されてしまいます。

「新宝島」は、なにしろ関西で戦後最初に出版された単行本です。描き版の技術は、正直なところ、最低でした。

漫画と活字本の出版では事情が異なるだろうが、当時の大阪は物資だけでなく、出版に携わる技術者も不足していたようである。このような状況を東京にいる上司小剣がどれほど把握していたかはわからない。しかし、育英出版が漫画や児童書を中心に出版していたことで、やはり世間では「赤本屋」と見られていたのではないか。

上司小剣が育英出版から選集を出すことになったのは、弟子の植村繁樹が勤めていたからであるが、⑨の書簡では「本の出版株式会社の社長藤田^⑨といふ若い人が大阪人に珍らしく理解のある人物で、一つはそれに動かされたのでした」と説明している。昭和二十二年九月一日発行の「関西出版新聞」第三号に掲載された「台評会大阪の絵本」には、育英出版から社長の藤田周二、編集部長の近藤健二が出席している。「絵本は母親が買え」というスローガンをかけ「では？」という意見に対し、藤田は「読む子供の心から欲しがるものこそ必要だ。但し赤本なし、という条件で」と主張している。藤田周二は「赤本」ではない、すなわち低俗で粗雑ではない「絵本」を作るべきだと考えていたのである。実際に上司小剣と藤田周二との間でどのようなやりとりがあつたのかわからないため、推測の域を出ないが、このような良質の本を作りたいという藤田の思いに、上司小剣も心を動かされたのではないだろうか。

⑨の書簡からは、「物価高の現在、あの本が一日も早く出ないと、経済生活に脅かされるといふ台所の問題もあり、二ヶ月余もおくれましたので、四苦八苦のていでございました」という、戦後の物価高で苦しんでいた上司小剣の生活状態も窺える。さらに、『上司小剣選集』は各巻「一万部づつ刷る」予定であつたことや、契約金一万円、一巻の印税一万円であつたことがわかる。契約金や印税を先に受け取っていたために、上司小剣自身も刊行を急いだのである。上司小剣が自分の「台所の問題」を正直に打ち明けたのは、石井鶴三の装幀を待てなかつた事情を了解してもらいたかつたからである。石井鶴三には「東京」第四部〈建設篇〉の挿絵と装幀を頼んでいたこともあるが、上司小剣は『上司小剣選集』のことで、今まで築いてきた石井鶴三との信頼関係を壊したくなかつたのだらう。

おわりに

今回紹介した書簡からは、晩年の上司小剣の文学活動や生活の様子が見えてきた。上司小剣は、ライフワークであつた長篇小説「東京」の完結に意欲を燃やし、最期の仕事として『上司小剣選集』の刊行を急いでいた。上司小剣は⑨の書簡で、「涼しくなりましたら、是非一度お目にかかつて久しぶりにいろいろ申し上げたいと存じ「東京」のお打ち合せもいたしたいと思つて居ります」と述べていたが、石井鶴三との会談が実現することはなかつた。上司小剣は、昭和二十二年九月一日に胃瘻瘻を起こした後、脳溢血で人事不省に陥り、九月二日に帰らぬ人となつた。信州大学蔵石井鶴三関連資料には、昭和二十二年九月四日消印の上司小剣の訃報（仮番号「書4-237」）も残されている。差出人は息子の上司延彦と上司延秋、友

人の正宗白鳥の連名である。安部宙之介は『白鳥その他の手紙』（前掲）で「葬儀準備を私が中心となって進行させた」「白鳥氏には対外的なことを相談した」「植村君が印税を持参したので助かった」と回想している。

また、『上司小剣選集』の出版準備の手順や進捗状況、契約金や印税の額が明らかになった意味は大きい。東京と大阪ではやはり出版事情が異なる。上司小剣や石井鶴三が大阪の出版社に不安を感じていたのも、距離の問題だけではなく、仕事の勝手が違ったためではないだろうか。大阪の出版については、吉川登編『近代大阪の出版』（平成22年2月8日発行、創元社）や浦西和彦・増田周子・荒井真理重編『大阪文芸雑誌総覧』（平成25年2月20日発行、和泉書院）などの成果があるが、戦後の状況については、まだわかっていないことも多い。本稿で紹介した石井鶴三宛上司小剣書簡は、戦後の大阪の出版状況を考える上で価値ある資料の一つといえよう。

注

- (1) 第一部〈愛欲篇〉は、大正十年二月二十日から同年七月九日まで『東京朝日新聞』に連載された。大正十年十二月二十五日には『東京第一部愛欲篇』が大鑑閣より刊行されている。第二部〈労働篇〉は、大正十年七月から大正十一年八月まで『中央公論』と『解放』に分載、『東京第二部労働篇』は大正十一年八月二十五日に大鑑閣より刊行された。第三部〈争闘篇〉はまず大正十二年一、五月に『解放』に発表され、その続きが『東京朝日新聞』に大正十二年十月一日から同年十二月二十九日まで『東京朝日新聞』に連載された。さらに、第一部〈愛欲篇〉、第二部〈労働篇〉、第三部〈争闘篇〉を昭和

三年十一月一日に新潮社より刊行された『現代長篇小説全集第十六巻（上司小剣篇）』に収録している。

- (2) 上司小剣の小説と石井鶴三の挿絵や装幀については、拙稿「上司小剣「森の家」「花道」の挿絵と装幀に関して」（信州大学附属図書館研究）第1号、平成24年3月31日）、上司小剣「東京〈愛欲篇〉の新聞連載の事情」（信州大学附属図書館研究）第2号、平成25年1月31日）、上司小剣「東京第一部愛欲篇」の制作状況」（信州大学附属図書館研究）第3号、平成26年1月31日）、上司小剣「東京第二部労働篇」の出版とその後」（信州大学所蔵石井鶴三関連資料から）」（信州大学附属図書館研究）第4号、平成27年1月31日）にまとめた。

なお、信州大学蔵石井鶴三関連資料にある石井鶴三宛上司小剣書簡のうち、紹介していないものとして、石井鶴三に宛てた上司小剣の年賀状と封筒のみのものがある。年賀状は、大正十一年一月一日（仮番号「高1-225」）、大正十二年一月一日（仮番号「高1-226」）、昭和六年一月一日（仮番号「高1-224」）である。いずれも葉書で、宛名はペン書き、裏面は印刷である。また、大正八年九月二日（仮番号「高1-25」）は封筒のみである。

- (3) 『上司小剣選集1 平和主義者』の収録作品については、拙稿「上司小剣文学研究案内」（『上司小剣文学研究』平成17年10月25日発行、和泉書院）で解説したが、『上司小剣選集1 平和主義者』に、大正期の代表作だけでなく、昭和期の作品があわせて収録されたのは、敗戦直後の情勢を意識しての選択だと思われる。同様のことは、その他の巻についても言えるだろう。

- (4) 桜井哲夫『廃墟の残響 戦後漫画の原像』（平成27年3月23日発行、NTT出版）によると、『新宝島』の発行部数については諸説ある。

- (5) 育英出版社長の藤田周二は、昭和二十三年一月に日本出版協会関西支部第一回代議員に選出されている（『関西出版新聞』第10号、昭和23年2月1日発行）。

参考文献

- 植村繁樹 『葬送行進曲』(昭和22年8月30日発行、育英出版)
植村繁樹 『眺の町〈少年少女小説〉』(昭和23年9月30日発行、育英出版)
安部宙之介 『白鳥その他の手紙』(昭和42年1月5日発行、木犀書房)
『手塚治虫漫画全集281新宝島』(昭和59年10月3日発行、講談社)
『石井鶴三日記 第三卷』(平成17年3月17日、形文社)
桜井哲夫 『廢墟の残響 戦後漫画の原像』(平成27年3月23日発行、NTT出版)